

地域プロセスモデルの実証研究

研究分担者 丸橋 繁 福島県立医科大学 肝胆膵・移植外科 主任教授

研究要旨：

人口比別臓器移植提供が少ない地域のひとつである福島県における臓器移植・提供に関する一般市民の態度・行動について調査した。臓器提供および臓器移植に関する市民公開講座を開催し、参加者を対象としたアンケート調査を行った。また、「公開講座」を一般啓発の社会実装介入とし、その前後における参加者の態度・行動の変化について評価した。参加者の内訳では、年齢で30歳代、40歳代、50歳代が全体の約7割を占め、医療従事者が35%であった。臓器提供に関する行動変容ステージ調査では、「関心なし」は認めず、「関心がある」が22名（46%）と最も多く、「意思表示を行っている」が17名（36%）と多かった。公開講座前後において、臓器提供の行動変容ステージでは「関心があるが、臓器提供する/しないは考えていない」の回答率が23%から12.2%に減少し、「関心があるが、臓器提供する/しないは考えている」あるいは「臓器提供する/しないは決めたが、意思表示するまでは考えていない」の回答率が増加した。また、臓器提供の意思では「臓器提供したい」が増加し、臓器移植・臓器提供に対するイメージでは、「身近に感じる」「誇りに感じる」という回答率が増加し、「不安」が減少した。今回実施した「公開講座」は聴講者の臓器移植に対するイメージや臓器提供の意思を変化させ、臓器提供の行動ステージの変容に一定の効果があったものと考えられる。

A. 研究目的

地域プロセスモデルの実証研究では、福島県を人口比別臓器移植提供が少ない地域のパイロット地域として、臓器移植・提供に関する一般市民の態度・行動について明らかにすることを目的とした。令和4年度には、福島県民の臓器移植・提供に関する態度・行動について明らかにするために、アンケート調査を行った。また、「公開講座」を一般啓発の社会実装介入とし、介入による効果を測定（公開講座前後の調査結果の比較）することも目的とした。

B. 研究方法

市民公開講座の参加者を対象として、公開講座開始時と終了時にアンケート調査を行った。市民公開講座の開催方法は、現地参加およびWEB参加のハイブリット開催とした。アンケート調査方法は、現地参加者には記入式アンケートを行い、Web参加者にはGoogle formを用いたwebアンケートを行った。市民公開講座で使用したアンケート項目については、資料1_受講前アンケート、資料2_受講後アンケートとして添付する。

市民公開講座は第1部と第2部で構成され、第1部では「臓器移植」をテーマに4人の演者による講演を行った。次いで、第2部では第1部の内容を踏まえた公開ディスカッションを行った。以下に、第1部と第2部の構成を簡潔に示す（資料3参照）。

「第1部 移植に関するセミナー」
講演1「臓器提供の意思表示ってなあに？」

演者；福島県臓器移植推進財団

舟山久美 篠木美香

講演2「Gift of Life -娘に繋いだいのち-」

演者；福島県立医科大学付属病院

看護師（肝移植レシピエント）鈴木陽子
講演3「妻が、いまも誰かの人生を支えている」
演者；脳死ドナーご家族 五十嵐利幸

講演4「いま若い世代は何を考えているのか
福島県の高校生・大学生のアンケート結果から」

演者；福島県立医科大学 看護学部
山内麻里子、西野結愛

「第2部 臓器移植・臓器提供についてみんなで考えよう」

ゲストとしてシンガーソングライターの氏家エイミーさんを迎え、第1部の演者および移植医を交えて、臓器移植に関する話題を議論した。

市民公開講座の開催にあたり、福島県内の新聞社およびテレビ局の後援を取得し、市民公開講座の開催を広報した。

C. 研究結果

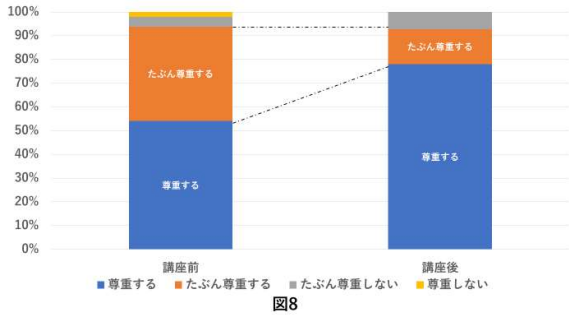
48名より回答が得られ、男女比は28（58.3%）:20（41.7%）であった。年齢の分布は、40歳代が14人（29.2%）と最も多く、次いで、30歳代と50歳代がそれぞれ10人（20.8%）であった（図1）。



図1

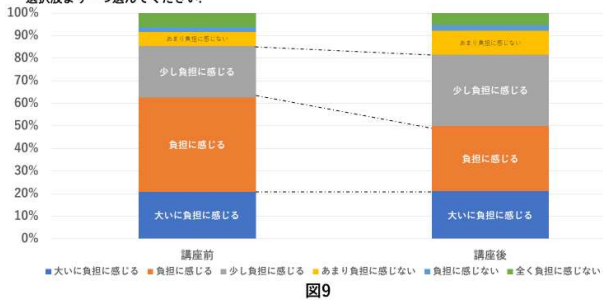
問6では、『仮に、あなたのご家族の誰かが脳死と判定された場合または心臓が停止し死亡と判断された場合に、その方が臓器提供の意思を書面によって表示をしていた場合、あなたは、その意思を尊重しますか。』という質問を行った。公開講座前後を比較すると、『たぶん尊重する』が40%から15%に減少し、『尊重する』が54%から78%に増加した(図8)。

問6. 仮に、あなたのご家族の誰かが脳死と判定された場合または心臓が停止し死亡と判断された場合に、その方が臓器提供の意思を書面によって表示をしていた場合、あなたは、その意思を尊重しますか。選択肢より一つ選んでください。



問7では、『仮に、あなたのご家族の誰かが脳死と判定された場合または心臓が停止し死亡と判断された場合に、その方が臓器提供について何も意思表示をしていなかった場合、臓器提供を承諾するかどうかはご家族の総意で決まります。あなたは、ご家族の臓器提供を決断することにに対し負担を感じますか。』という質問を行った。公開講座前後を比較すると、『大いに負担を感じる』『負担を感じる』『少し負担を感じる』のいずれかを回答した参加者の比率は、それぞれ85%、81%と変化がなかった。(図9)。

問7. 仮に、あなたのご家族の誰かが脳死と判定された場合または心臓が停止し死亡と判断された場合に、その方が臓器提供について何も意思表示をしていなかった場合、臓器提供を承諾するかどうかはご家族の総意で決まります。あなたは、ご家族の臓器提供を決断することにに対し負担を感じますか。選択肢より一つ選んでください。



問9では、臓器移植に対して『身近に感じますか?』『不安に感じますか?』『誇りを感じると感じますか?』という質問を行った。公開講座前後を比較すると、『臓器移植に対して身近に感じますか?』という質問において、そう思うの回答率は19%から31%に増加した。同様に『誇りに感じますか?』という質問では、そう思うの回答率は、27%から36%に増加した。一方で、『不安に感じますか?』という質問では、『ややそう思う』と答えた方の比率は43%から、18%に減少した。(図10)。

問9. 以下の項目について、あなたのお気持ちを教えてください。

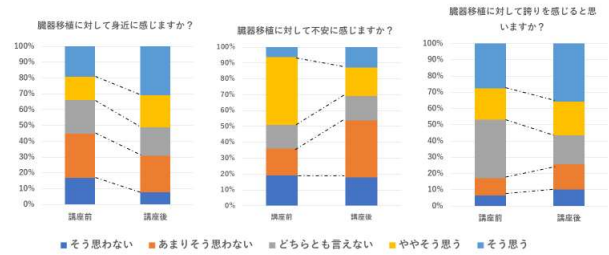


図10

D. 考察

本研究では、臓器提供および臓器移植の普及啓発を目的として市民公開講座を開催し、アンケートを用いて、臓器移植の意識調査を実施した。比較対象として、令和3年9月に実施された「移植医療に関する世論調査」の結果(内閣府のHPに公開)を参照した。

公開講座の参加者の内訳では、年齢で30歳代、40歳代、50歳代が全体の約7割を占め、医療従事者が35%と多い結果であった。すなわち、今回のアンケートの対象は、福島県在住の一般市民を代表するサンプルとは異なった背景を有しており、アンケート結果の解釈においては留意が必要であると考えられた。

臓器提供に関する行動変容ステージを調査した問1では、「関心なし」の回答はなく、「関心がある」が22名(46%)と最も多く、「意思表示を行っている」が17名(36%)と多かった。世論調査結果では、「関心なし」が16%、「意思表示を行っている」が11.2%であり、大きく異なる点であった。

臓器提供の意思表示を行っていない理由については、抵抗感、不安感があるという回答がおよそ58.3%、50.0%であり(表1)、世論調査の27.1%、34.3%を上回る結果であった。

また、臓器移植に関心を持った理由を調査した問2においても、今回の調査結果では「身近に臓器移植を受けた者/希望者がいる」あるいは「身近に臓器提供をした者/検討した者がいる」という回答が11%、12%と多かった。さらに、家族と臓器提供に関して会話した経験の調査では、「しばしば話したことがある」「数回ある」「一度だけある」が10%、30%、13%と多かった(世論調査結果; 1.8%、21.5%、20%)。このことは、参加者に医療従事者が多く、臓器移植に対する関心の高い集団であることが強く関連していると考えられた。

次に、「公開講座」前後で、アンケート調査結果を比較した結果(図6-10)から、一般啓発の社会実装介入として実施した「公開講座」の介入効果を考察した。

行動変容のステージでは、「関心があるが、臓器提供する/しないは考えていない」の回答率が23%から12.2%に減少し、「関心があるが、臓器提供する/しないは考えている」あるいは「臓器提供する/しないは決めたが、意思表示するまでは考えていない」の回答率が増加した。このことは、介入(公開講座)により、行動変容が次のステージに移行したと考

えられた。

公開講座前後で臓器提供の意思について変化を示す(図7)。公開講座後に、「提供したい」という回答率が増加していた。さらに家族が臓器提供の表示をしていた場合に「(家族の意思を)尊重する」という回答も大幅に増加した(図8)。一方で、家族が提供意思表示をしていなかった場合の負担感については、「負担を感じる(大いに負担を感じる、負担を感じる、少し負担を感じる、の総和)」の回答率に大きな変化は見られなかった。

臓器移植・臓器提供に対するイメージを調査した問9では、「公開講座」前後で、「身近に感じる」「誇りに感じる」という回答率が増加し、「不安」が減少した(図10)。

これらの結果から、「公開講座」は聴講者の臓器移植に対するイメージを変化させ、臓器提供の行動ステージの変容に一定の効果があったものと考えられる。

本研究で開催した公開講座の構成は、臓器移植に関する知識や情報提供のみならず、移植レシピエントあるいは臓器提供ドナー家族の経験を通して臓器移植を市民の視点で考えるパネルディスカッション形式を採用した。このような構成は、聴講者が臓器提供を知る・考える契機として効果があり、「公開講座」が一般啓発の介入として有用であったものと考えられる。

今後、意識調査対象を拡大し、母集団である福島県の在住市民に近い代表サンプルを調査する。これにより、福島県における臓器移植・臓器提供に関する一般市民の態度・行動を明らかとし、人口比別臓器移植提供が少ない地域の要因を明らかにする予定である。

E. 結論

今回の調査対象は、臓器移植に対する関心度の高い集団であった。「公開講座」は聴講者の臓器移植に対するイメージを変化させ、臓器提供の行動ステージを変容するのに、一定の効果があったものと考えられる。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表
該当なし
2. 学会発表
該当なし

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

1. 特許取得
該当なし
2. 実用新案登録
該当なし
3. その他
該当なし

表1 臓器提供の意思表示を行っていない理由について

理由の項目 (%)	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
臓器提供に抵抗感があるから	11.1	36.1	19.4	33.2
臓器提供に不安感があるから	8.3	41.7	13.9	36.1
臓器提供には肯定的だが、意思表示はしたくないから	2.8	30.6	22.2	44.4
拒否の意思を記入したくないから	0	11.1	27.8	61.1
拒否の意思を記入できることは知らなかったから	2.8	11.1	16.7	69.4
臓器提供をしようかどうかは家族に任せたいから	5.6	11.1	16.7	66.7
臓器提供やその意思表示に家族が反対するから	8.3	16.7	16.7	58.3
自分の意思が決まらないからあるいは後で記入しようと思っていたから	5.6	33.3	22.2	38.9
臓器提供やその意思表示についてよく知らないからあるいは記入の仕方がよくわからないから	0	13.9	22.2	63.9
意思表示ができるものを何も持っていないから	2.8	5.6	22.2	69.4
臓器提供は自分がしなくても誰かがやれば良いと思うから	0	19.4	16.7	63.9
臓器提供が誰かの役に立つと思えないから	0	2.8	19.4	77.8